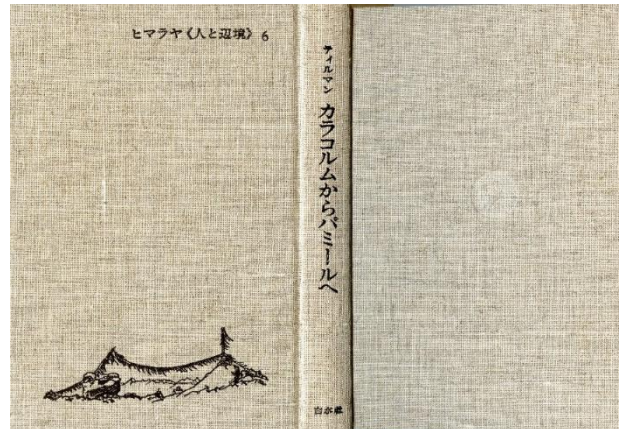
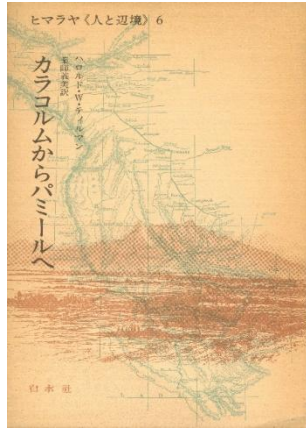


「ティルマンのワハン回廊」



テキスト：H.W.ティルマン著 薬師義美訳 『カラコルムからパミールへ』

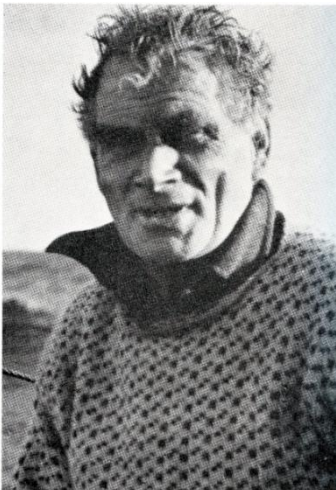
ヒマラヤ〈人と辺境〉白水社 1975年

原著：H.W.Tilman “Two Mountains and a River” Cambridge Univ. Press, 1949

ふたつの山：ラカポシとムズターグ・アタ ひとつの川：オクサス川

第二次大戦後間もない1947年、ティルマンはスイス隊に招かれラカポシ登山隊に参加したあと、盟友シプトンを新疆に訪ね、ムズターグ・アタを目指した。両山とも登頂には至らなかった。そして帰路はオクサス川源流のワハン回廊を単身で下降した。この旅は、大戦直後の混沌とした時代の間隙を縫ったものである。査証さえも持たぬ大胆きわまる旅は、アフガンの官憲に拘禁連行のすえ国外追放されるという顛末で、1600キロに及ぶ苦難の長旅の末チトラールに帰還するまでのもので、ティルマン独特のブラック・ユーモアを交えた筆致が興味深い。

読書会では探検・登山家ティルマンの横顔と、テキストのワハン回廊の部分に絞って紹介する。



パン屋のおやじスタイルのティルマン

(参考) ティルマンの評伝

J.R.L.アンダーソン著 水野勉訳

『高い山 はるかな海

探検家ティルマンの生涯』

山と溪谷社 1982年

原著：

“High Mountains and Cold Sea – A

Biography of H.W.Tilman “

Victor Gollanz, London, 1980

年譜（評伝および訳者あとがきより抜粋）

1898年 英国生れ

1915～1919年 陸軍士官学校を経て軍務に。第一次大戦中は砲兵隊に所属し西部戦線に出陣、
2度の負傷、戦功十字章を授与。

1919年 軍を退役（中尉）、ケニアに入植。

1930年 後に名コンビとなるシプトンと東アフリカで登山をはじめ。
キリマンジェロ、ケニア山塊

1932年 シプトンとルエンゾリ遠征。
休暇で帰国中に湖水地方で大事故、友人を失い自身も重症。

1933年 キリマンジェロ単独登頂。
ウガンダから西海岸まで自転車で大横断(単独)

⇒ *Snow on the Equator*, Bell, 1937

『赤道の山』吉沢一郎訳 あかね書房 1967年

1934年 シプトンとナンダデヴィ遠征、内院に至り登路を見出す。
アルパイン・クラブ入会

1935年 英国隊第5次エヴェレスト遠征に参加（隊長シプトン）

1936年 ナンダデヴィ 7816m初登頂（当時の登頂最高峰、オデールと）

⇒ *The Ascent of Nanda Devi*, Cambridge Univ. Press, 1937

『ナンダデヴィ登攀』池野一郎訳 朋文堂 1942年

1937年 シプトンとカラコルムへ。シャクスガム溪谷探査。

1938年 英国第7次エヴェレスト遠征隊長（シプトンも隊員として参加）。

⇒ *Mount Everest—1938*, Cambridge Univ. Press, 1948

1939年 アッサム・ヒマラヤ踏査、ゴリ・チェン試登、熱病に罹る。同行のシェルパ死亡。

1939～1945年 第二次大戦に従軍。フランスで戦闘、ダンケルクから撤退、

インドおよびイラク、北アフリカへ転戦、(少佐)

アルバニアに落下傘降下、パルチザンとの共同作戦に連絡将校として参加、

北イタリアでの抵抗運動への協力、ベルノの解放に貢献、後に名誉市民に

戦後すぐに軍を退役

1947年 スイス隊に参加してラカポシ試登。

シプトンとムズターグ・アタ試登。

帰路ワハン回廊を下降。逮捕ファイザバードまで連行される。

⇒ *Two Mountains and a River*, Cambridge Univ. Press, 1949

『カラコルムからパミールへ』薬師義美訳 白水社 1975年

1948年 シプトンと新疆省のボグド・オーラとチャクラギール試登。

帰途はミンタカ峠を越えパキスタン北辺を西に辿りチトラールへ。

⇒ *China to Chitral*, Cambridge Univ. Press, 1951

1949年 ネパール踏査。ランタン、ガネッシュ、ジュガール・ヒマールなど。

1950年 アンナプルナ I V 峰試登。ムスタン踏査、マナスル及びエヴェレスト南面ルート of 偵察。

⇒ *Nepal Himalaya*, Cambridge Univ. Press. 1952

『ネパール・ヒマラヤ』 深田久弥訳 あかね書房 1971年

1950～53年 独立後のビルマで外交官生活。マンダレー近くのマイミョで英国領事を務める。

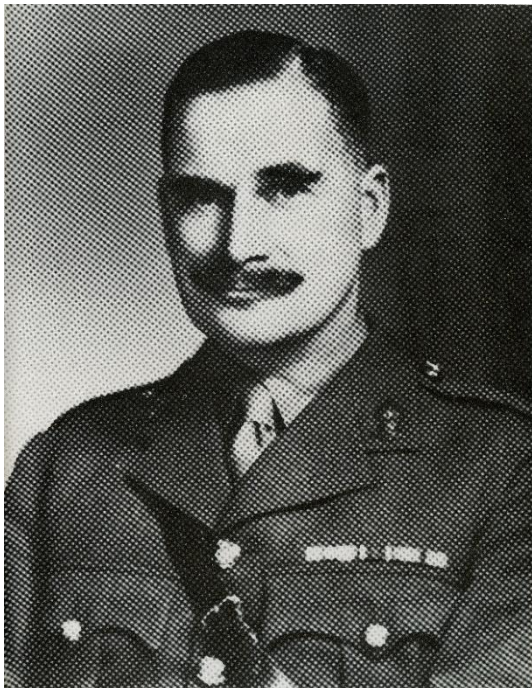
1954年 セント・アンドリュース大学から名誉学位

1954～77年 老帆船ミスチーフ号を入手。以後帆船による遠隔地の航海に乗り出し、英国航海史に名を残した。

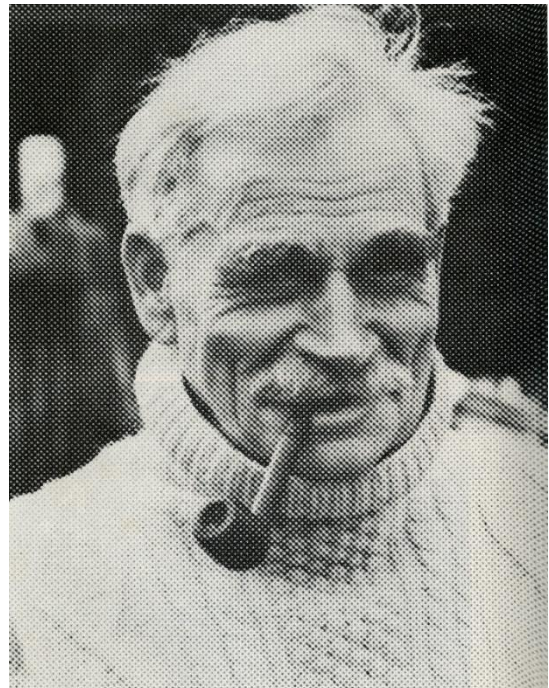
パタゴニア探検（アイスクャップ初横断）、西部グリーンランド、バフィン湾とパイロット島、東部グリーンランド、サウス・ジョージアと南シェトランド群島、スピッツベルゲン周航など

1957年 アルパイン・クラブ副会長

1977年 南極海・南シェトランド諸島のスミス島遠征に参加、
フォークランドに向けリオデジャネイロを11月1日に出帆、
その後消息を絶つ。79歳



第2次大戦勃発時のティルマン



晩年のティルマン

—目次—

- 1 食料と装備
- 2 カラチからアボッタバードへ
- 3 山へ向かって
- 4 ギルギッド — 到着そして出発
- 5 ジャグロット谷へ
- 6 二つの尾根
- 7 ダインヨール谷

- 8 ククアイ氷河
- 9 チャルトからミスガールへ
- 10 ミスガールからタシクルガンへ

- 11 ムズターグ・アタ
- 12 カシュガールへ

- 13 別の帰路
- 14 オクサス川源流
- 15 サルハドからイシュカシムへ — 非拘禁逮捕
- 16 イシュカシムにて — 監禁逮捕
- 17 行先不明
- 18 ファイザバード、そして自由に

諏訪多栄三 『ワハンのティルマン』より

「カラコルムと東パミールで登山をして、帰り道をワハン回廊に求めた 1947 年のティルマンの旅は、徒労と苦難の連続である。特にワクジール峠からオクサス川の源流を下るあたりは、ツムジ曲がりのティルマンならではの舞台となり、興味津々として本を手ばなせない。・・・略・・・ 齢四十九で、カシュガルから、ワハン回廊を歩き通してチトラールに出るのであるが、これはオクサス川の源流にひかれ、山をさがしたかったからで、第 13 章の「別の帰路」以下に語られる。」

「しかもティルマンは、アフガニスタン入国の査証をとらずに出発する。この点は英国伝統の気質である。この辺境には十七世紀から十九世紀にかけて、《みんな行きたいところに行け、政府の意向など気にするな》という英国の権勢が背後にあった。」

白水社ヒマラヤ《人と辺境》月報第 2 号 本書付録

第13章 別の帰路

カシュガル発 シプトンと別れ 1947年9月14日出発

同行者 ナイアド・シャー フンザ人 旧知の通訳 ワヒ語の他4言語を話す。
タシュクルガンからボザイ・グンバズまで同行
「忠実だが間抜け」
ユスフ トルコ人従僕 カシュガルの領事館に務め
スリナガールに住む父親を訪ねる目的あり、
英国人を頼ってポニー1頭を連れて志願
「役立たず」

先ずはタシュクルガンまで：通常ルートを使わず、ムズターグ・アタ東面の偵察の出来るトゥル・ブルン川に入り、まだ知られていないトゥル・ブルン峠とヤンギ・ダワン峠を経由。

- 2日目 キジャク峠を経てカラタシュ溪谷に下り、チャート泊
- 3日目 カラタシュ峠直下、約4,500mのユルトに泊
- 4日目 **カラタシュ峠越え**、トゥル・ブルン川合流点下流の草地に幕営
- 5日目 **カン・ショワール**という《アオウル》(住居の集まり)の《ユルト》(遊牧民の円形フェルト・テント)に泊まる。
「泣き叫ぶ赤ん坊、口やかましい女と騒々しいその夫」
- 6日目 トウル・ブルン谷の源流のアウルのユルト泊 夜間降雪激し。
- 7日目 峠はポニーで越せず、キルギス人案内人とヤクを雇う。
(馬を連れたユスフは、ムズターグ・アタの西側まわり)
- 8日目 **トゥル・ブルン峠越え**、無人のチチクリク大平原を見下ろす。300m下って幕営
ヤンギ・ダワン峠を越え、**チチクリクの《マイダン》**(広場)を横断、ユスフと合流
かつて玄奘も言及し、スタインも見た古いサライ跡を見る。
平原の西端に見つけたユルトに泊る。「貧乏で不潔な大家族の典型」
- 9日目 デルシャドのゴルジュを経て**タシュクルガン**へ。ナイアド・シャー合流

タシュクルガン サリコルのかつての首都

個人の資格での訪問であり、中国人官吏、地方長官も冷ややか、招待の申し出もなく
安心、1日休養

- 1日目 タグラク・グンバスで墓の中の食事
ダフダールでは家の中の食事
ベイグ着 中国の駐屯部隊はミンタカ方面に移動していた。
キルギス人のユルトに泊まる。キルギス人 フンザ人 トルコ人 英国人多彩な顔
触れ。

2 日目 ミンタカ・カラウル通過

中国兵駐屯所：ワクジール、ミンタカ両方の谷を監視出来る位置にあり。

朝 10 時過ぎ、指揮官はまだ寝ており、部下にロシア製ブランデーを与えて計画を「さりげなく」説明。ソ連領のキルギス人の襲撃に備え、初日のみ中国人兵士 1 名の同行を条件に通過できることに。

「広々とした美しい」ワクジール谷に簡単に入れたので、ブランデーは必要なかったと悔しがる。峠手前で幕営。この日オヴィス・ポリの角多数散乱を見る。

第 14 章 オクサス川源流

本流・支流問題 ① ヴィクトリア湖から流れる（大）パミール川が本流（1838 年ウッド大尉）
② チャクマクティン湖から流れる小パミール川説
③ 現在の源流氷河説（1894 年カーゾン郷）

ティルマンは、ヒンドゥー・クシュ山脈最東端の氷河の氷穴を源流とすることで納得

3 日目 ワクジール峠越え。峠 4800m は無人、積雪あり。国境駐屯所もない。

ソ連側からの侵入者を恐れ中国領に移動する多数のキルギス人を見る。

オクサス川＝アブ・イ・ワハンに入る。キルギス人のユルト泊

4 日目 カマ・スー谷出合いから南岸を 13 km 下り、ユルトに泊。

5 日目 ボザイ・グンバズ通過。小パミール川を数キロ遡り、族長の《アオウル》着、客人用のユルト泊。

「話ざらいで馬のようなげつぷをするダッタン人」の族長は、イギリス人侵入のニュースをいち早くサルハドに伝える使者を送った。イルシャド峠越えの出国を断固拒否され、(64 キロ先の)サルハドの役人に出頭すべしという。

ナイアド・シャーを解雇。

6 日目 族長との交渉断念。64 km のゴルジュを下降、カルワン・バラシ通過、バイクラのイルシャド峠への分かれ道でサルハドへの出頭を決断。ランガールのグンバズで仮眠。

7 日目 午前 2 時に出発。ダガ・ジルガ川渡河、ダリズ峠越え。

重要地点のサルハド着。司令官のもとに、警察官と兵隊の国境駐屯所あり。住民より警察官が多い。

「サルハドの警察官は、汚くて寄生虫的で、道化と野獣性を奇妙に混ぜ合わせた、その典型

的なものを見せていた。」

パターン人らしき「司令官の義務と楽しみは、……すべての旅人を妨害することである。」

司令官の官舎の敷地内に幕営。番兵付き。

第 15 章 サルハドからイシュカシムへ ——非拘禁逮捕

- 囚われの初日 司令官から「イシュカシム（片道 170 km）の地方長官から放免か処分かの命令が来るまでここに滞在せよ」と。ヒンドークシュ登れそうな山の物色。
- 2 日目 警官付きの散歩。座り込みストライキなど。
- 3 日目 イシュカシムからの使者が帰着。パロギール峠は不可。護衛付きでイシュカシムに連行されることに。
- 10 月 5 日 **サルハド発**。16 km地点で幕営。食料すべて現地調達、住民負担。
- 翌日 34 km進んでババ・タンギ村通過、さらに 3 km先の汚い村で泊まる。チベットの汚いことで有名なパーリ・ゾンの「汚物、塵、油脂、煙、そして貧困。しかし、申し分のない羊肉」を思い出す。
- 翌日 パミール川との合流点通過、数 kmでカラ・パンジャ、幕営。水浴。**カラ・パンジャ**は古い城、泥壁の砦ある大きな村。対岸のソ連領に、トラック、トレーラーなどの活発な動きを見る。「旅人は馬を見るとビッコになる（ベンガル人の諺）とすれば、トラックを見たら・・・」
- ヒンドークシュの 6000m級の山々の山名は聞き出せず。
西北西のシャフダラ山脈中にカール・マルクス峰 6726mを望む。
- 翌日 ピギッシュのアンズの果樹園で幕営。
- 翌日 ワルップ村から 10 km地点で幕営。
- 10 月 10 日 カジ・デー村通過（1960 年京大隊のノシャック 7490m初登攀時の入り口の村）イシュカシム到着。

イシュカシムは、バダクシャン地方の東端、ワハンへの入り口、地方長官在任の行政の中心地。これまでの英国人の足跡：1838 年 J. ウッド大尉 ヴィクトリア湖まで
1868~69 年 パンディット《ミルザ》ファイザバード⇒イシュカシム
⇒チャクマクティン湖⇒ヤルカンド
1873 年 パンディット《ムンシ》イシュカシムより 160 km下降

第 16 章 イシュカシムにて — 監禁逮捕

地方長官邸で警察署長の監督下、怪しげなヒンズー語の通訳が付き、スパイ容疑で荷物検査。

地図、コンパス、ピッケル、ポケットナイフ、本、書類、日記、鉛筆、パスポートなど押収され、泥壁の 3 メートル四方の監房に、番兵付きの監禁状態に。

地方長官への面談を求めて、ハンスト。

処分の指令待ちで少なくとも 5 日間、その間尋問につぐ尋問。

予備役将校の身分、戦歴、地図の所持などからスパイ容疑確実に。

「自分の道楽のためだけにワハンにやって来たことを、納得させることは、もとより至難のことであった。」

結局、サングリッチ谷經由チトラールへ送り出すという（まったくの嘘）。

地図、書類、日記は返却されず、国境で手渡すと（これもまた嘘）

第17章 行先不明

結局、護衛隊4名付きで出発。南西の低いサルダブ峠越え
地図もなく、行先判らず。道中再三兵士ともめて銃口をつきつけられる。
37km進んでティグラン泊

3日目 ワルドゥジ川、スフィアン村など経由で、チャカランの休憩所泊、
（チトラール方面への峠下の村）サングリッチではなかった。

10月19日 本来国境に着くはずの日
ヒンドゥー・クシュの山脈見えず、着いたところはバハラク。
バハラク平原の北端に小さな村パ・イ・シャル通過、29kmのゴルジュへ

10月30日 北西に進み着いたところは**ファイザバード**
自動車道とトラックを見てそれを悟る。

ファイザバードは、オクサスの支流コクチャ川を臨み、ワハン地区も含めバダクシヤンの首都。当時既にカーブルへの車道が開通し、重要な交易センターとなり、北部アフガニスタンの軍隊駐屯地でもあった。

第18章 フィザバード、そして自由に

将軍の監視下、官舎内で丸腰の番兵付きで監禁。

ひたすら、カーブルからの電信待ち。

9日後、チトラールへの旅の許可の見込みを得る。

パスポート以外、日記など書類すべてはカーブルの外務省に送られることに

旅の初日 ロバ集めなどに全く役立たずの丸腰の兵士1名が付き添い出発。

長い1日、最悪の行程で夜半にバハラクに。

5日目 ゼバックで地方長官に足止めを食う。午後インシティッチ、夜に**サングリッチ**着。
駐屯部隊あり、将軍からの手紙の効力で、将校が世話を焼く。

翌日 交代の護衛はドラー峠を越え、チトラールまで90kmを身柄受取受領書の受け取り
のために付く。

アフガン最後の前哨地点の汚い小屋に身なりのだらしない兵士3名駐屯。

ダッフアリン湖岸を通過、登り3時間で**ドラー峠 4500m**に。

峠付近には降雪、雪の吹き溜まりあり。

「私はケルンの方へ進み、疑心暗鬼にチトラールをじっと見下した。われわれはほんとうに自由の身になったのか、……ここには儀礼的な、神聖さを冒瀆するようなアフガンの国境標石は置かれてなかった。……今にも偉大なイギリスの統治下に入ろうとしているのに、確かな証拠もないのを知って失望する」

チトラール着 貴重な日記は結局返却されず、そのためか正確な記述はない。「年末に近い日にチトラールにたどり着いたと思われる」（諏訪多栄三）

着翌日、カシミール戦争を聞く。

同行のユスフはカシミールに行けず、また行く必要もなくなる（老父が既にラサに移住したとの情報をトルコ族商人より聞く）。長い道のりをカシュガルへ帰る。

「疲れ果て、虱だらけになり、しかも日記類を失ってチトラールへ下り始めたとき、ともかくも、この年は教えられることが多かったと私は感じたのであった。」

後に、ギルギットからカシュガルのシプトンに打電「威厳以外は被害なし」

.....

H.W.ティルマン(1898～1977)の人物像

- ・探検指向の登山家としてシプトンと名コンビ
- ・軽装備、少人数の小遠征隊を主張、実践
 - あれほど腹を空かした山はなかった。(ナンダデヴィでオーデル)
 - シェルパから最も恐れられた。
- ・生涯の自由人
 - ただし2度の大战には自ら従軍
- ・科学、医者嫌い
- ・高所に弱い
 - 1936年のエヴェレスト隊から外された。
- ・無口、寡黙
- ・皮肉屋、ツムジ曲がり
- ・女嫌い、生涯独身
 - アルパイン・クラブに女性が入会したと聞き退会
- ・旅先から故郷の姉に頻繁に手紙
- ・猛烈な読書家 文章にその引用多い
- ・大げさな表現が嫌い
 - 「文章に抑制が効き過ぎて真相が伝わらない恨みがある」(タイムス)